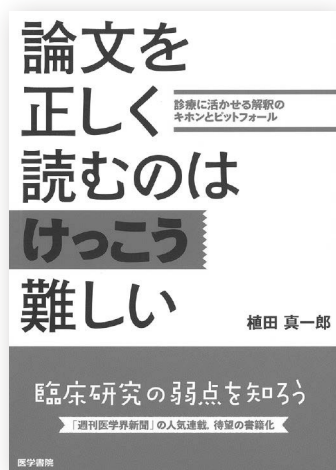




論文を正しく読むのは けっこう難しい

診療に活かせる解釈の
キホンとピットフォール

植田真一郎=著

定価：本体 3,200 円＋税
A5・240 頁／医学書院／2018
[ISBN978-4-260-03587-3]

「正しく論文を読む」ための 数々のパールに溢れた1冊

評者 本村和久 沖縄県立中部病院総合内科

インターネットの普及で情報が溢れる世の中となつて久しいが、「フェイクニュース」という言葉を目や耳にすることが増えたというのも、評者が最近感じるところである。何が正しい情報なのかを見極める眼力を得るのは「けっこう難しい」。自分自身の反省でもあるが、膨大な情報の海の中では、自分にとってわかりやすく都合のいい情報だけを切り貼りしがちになる。一次文献の結果の要約がまるでニュースのようにインターネットやメールで配信されているが、そのような時代であるからこそ「正しく論文を読む」のは医療者にとって必須の技術であると思う。

いつもやってしまっていることではないか！

本書をひもとけば、私のような粗忽者が陥りやすい、一見信用してしまいそうなトラップが何か、たちどころに理解できる。導入には、「アブストラクトと図の斜め読みはあぶない」の章がある。これは、私がいつもやってしまっていることではないか！ 「臨床試験のエンドポイントを読む」では、『「打率や防御率で得点を補正」していないか」とある。なるほど、「心血管イベント」とか一見わかりやすそうなエンドポイントが、実は「打率や防御率」みたいに複合されたエンドポイントになっていないか、注意が必要なのか！ など数々のパールに溢れている。

私が論文を読む時に読み落としていた項目をあげればいくら字数があっても足りないが、特に意識していなかったのが『「用法・用量」に注意しよう』である。1日1回なのか2回なのか、10 mg なのか20 mg なのか、用量設定試験が当然あって「用法・用量」が決められているが、それが当たり前になっているように今まで文献を見ていたと目を開かれた。

評者が勤務する沖縄県立中部病院では、研修医のみならず私のような指導医も、本書の著者である植田真一郎先生から直接、臨床研究に関して指導を受けられる恵まれた環境にあるが、積極的に情報発信・教育をされている植田先生のおかげで、「難しい」ことがわかりやすく本書で理解できるのはありがたいことと思う。序文にある「正しく学び、常に疑問を持つことをやめず、思考停止せず、安易な解決に逃げないこと」を肝に銘じて、日頃の臨床・教育・研究に関わっていきたく強く思わせる名著である。

